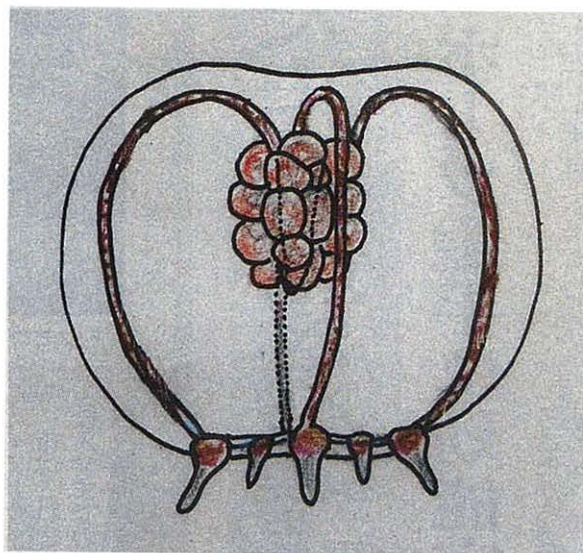


# カニウミヒドラ



久保田 信

99



カニウミヒドラは、クラゲ時代がとても短いため、一生のうちで優勢であるポリプ時代の名前が付けられている。和名が示す通り、カニの甲

羅にヒドラのようなポリプが付着している。そのポリプから小さなクラゲがたくさん繁殖時に生まれるのである。みなべ町で水揚げされる世界最大の「タカアシガニ」の腹部上にポリプが付着しているのを、京都大学瀬戸臨海実験所の内海富士夫先生が発見された。そして、遊離した成熟クラゲとともに、1939年に新種として記載された。カニウミヒドラはその複雑な群体性のポリプと対比して、クラゲの方はハネウミヒ

退化的で短命なカニウミヒドラのクラゲ  
(Uchinomi 1939改写)

ドラやカイヤドリヒドラクラゲと同様に、ごくごく単純な形態をしている。触手はあるが餌を捕らえることはない。傘径0・7ミリの縁に規則正しく、8本のごく短い触手らしきものが備わっている。そのうちの4本は他の4本よりさらに短い。口は開いておらず、餌を食べられないし、その必要もない。

クラゲの役割として大切な有性生殖を貫徹できれば、本種として生まれた意義は事足りる。つまり、クラゲとしてこの世に生まれたら、子孫つくりを迅速に行うのである。生殖巣は短い口柄(こっぺい)の周りにできていて、雌雄のクラゲはそれぞれ卵と精子を海中に放出して、受精卵をつくったら寿命が尽きる。

縁膜があるので少しは遊泳でき、雌雄のクラゲがなるべく接近して交配の効率を上げるのであろう。しかし、いついつの時間帯にクラゲはポリプから遊離し、有性生殖を実践するのは未知である。